

# 平成二十二年度 研修旅行（万葉旅行）報告

—— 始まりの奈良、めぐる感動。

二〇一〇年、西暦七一〇年の平城京遷都が行われてから一三〇〇年である。今年度の万葉旅行は、「日本の始まりの奈良」において記念すべき年に、池田三枝子先生と植田麦先生のご指導のもと、助手の荒金良美さんと約三〇名の学生とで九月一五日から一七日の二泊三日の行程で実施された。九月は暦でいうならば日ごとに秋の気配が深まる季節であるが、今年は残暑の厳しさが長く尾を引いていた。平城京を中心に古代の宮都をめぐり、当時の文化や歴史に触れる。当時の人々が尊んだ奈良の地は、変わらぬ姿で私

達を迎えてくれた。

小	齋	佐	森
坂	藤	々	川
紫	綾	木	和
沙	香	美	嘉
綺		菜	菜

## 一日目（九月一五日）

平城遷都一三〇〇年ということ、大いに盛り上がる奈良へとおりたち私たちはさっそく貸し切りバスへと乗り込み、まずは「甘檜丘」へと向かった。「甘檜丘」とは飛鳥寺の西にある丘陵のことを指す。この丘の頂からは「香久山・畝傍山・耳成山」の「大和三山」を一望することができる。この大和三山は『万葉集』中で中大兄皇子が詠んだ「中大兄近江の宮に天の下知らしめす天皇の三山の歌」（巻一・一三〜一四番）などにも見られ、また、香久山は特に

神聖視されており『風土記』などにも登場する。実際にその頂に立ち古代の人々が見たであろう景色と同じ景色を目にすることができ、とても感動した。

次に向かったのが「藤原宮跡」である。この「藤原宮跡」は持統天皇によつて建設された都であるが、六九四年から七一〇年の平城京遷都までの一六年間というわずかな期間しか都がおかれていなかった。「藤原」という名は「藤井が原」という地名からきているといわれている。訪れた際には、まだ建築物等が復元途中であつたために全体像を見ることはかなわなかつたが、それでも当時の宮城の柱の太さなどを体感でき、とても勉強になつた。

そして、次に私たちはいよいよ一日目のメインとも言える「大神神社」へと向かつた。「大神神社」は、本殿を設けておらず拝殿の奥にある三ツ鳥居を通して、三輪山全体をご神体として拝し、上代の信仰のかたちを今に伝える我が国最古の神社である。祭神は国土開拓の神とされる大物主神という神で、配祀は大己貴神と少彦名神である。天気はあいにくの雨ではあつたものの、雨の中にも趣が感じられた。境内のなかにある「巳の神杉」というご神木には大物主神の化身である白蛇に供えられた多くの卵がそなえてあつた。お賽銭やお酒が供えてあるところは見たことがあつたのだが、卵が供えてあるところを見たのは初めて

のことであり、非常に驚いたのを覚えている。バスのなかで池田先生から大物主神は美人の女の人が好きだから氣を付けるようにとの注意を受けていたものの、何の心配もなく無事に参拝することができた。このことに少し不満を覚えるものの神社そのものはとても魅力に溢れており、心行くまで参拝することができた。一同その壮大さに大騒ぎしながら大鳥居をくぐり最後に向かつたのは「天理図書館」である。

「天理図書館」は大正一四年四月に天理教管内の諸機関の蔵書を結集して、本教の総合図書館成立を計画したことが起源とされている。日本有数の規模を持つ図書館であり、国宝、重要文化財、重要美術品を含む和漢洋の貴重書、古典籍など約二〇〇万冊を所蔵しているという。ここでは、特別に普段決して見ることの叶わないであろう国宝にも指定されているような蔵書の数々を見せていただいた。貴重な本に囲まれてとても幸せなひと時を過ごすことができ、図書館好きにはたまらない訪問であつた。

## 二日目（九月一六日）

二日目は、希望者だけではあつたが天理教本部の見学から始まつた。天理教本部は、宿泊していた詰所から徒歩で一〇分程度のところにあつた。天理教は神道十三派の一つ

で、大和の農婦、中山みきを教祖とし、天保九年（一八三八）に創始されたものである。

本部内には学校施設が存在し、私たちが見学に行った時間にはちょうど朝の参拝の時間帯だったようで、大勢の学生が本殿で参拝していた。私は、さほど宗教とかかわりの深い学校に通っていたわけではないので、その光景に驚いたとともに、一つの信仰の形を見た気がした。

詰所に帰り、次に向かったのは石上神宮だ。石上神宮は布都御魂大神を主神とする神宮で、七支刀を始め多くの文化財を有している。境内に入るとまず目につくのは鶏である。しかも、小学校の飼育小屋などで見慣れた鶏ではなく、尾が長く、どこか風格すら醸し出す立派な鶏だ。そんな彼らとしばし戯れたのち、拝殿へ。参拝の後、国宝である石上神宮撰社出雲建雄神社拝殿を見に拝殿の反対側へと向かった。以前授業で質素だと聞いたことがあったが、実際見てみるとなんともし親しみやすい国宝だ、というのが正直な私の感想だ。もちろん、永久寺の建物の一つとして貴重な遺構を見学できたのはとても有意義ではあったが。

石上神宮を後にし、次は薬師寺に向かった。薬師寺は法相宗の大本山で、天武天皇により発願、持統天皇により本尊開眼された。

見学の初めは西塔と東塔。東塔は薬師寺創建当時から現

存しており、悠久の時を感じることができた。対する西塔は色合いも鮮やかで新しい。これは昭和五六年に復興されたからであり、これからゆつくり時をかけて東塔の形に近づいていくそうだ。一三〇〇年の時の流れを目で見ることができる貴重な機会だった。

次は金堂の薬師三尊像。仏像本体もさることながら、私はその台座に感動した。奈良時代における世界の文様が集約され、当時の文化の一片を見ているようだった。その後、大講堂や玄奘三藏院を見学し、唐招提寺に向かった。

唐招提寺は律宗の総本山で、鑑真和尚の私寺としてはじまり、後に弟子により金堂が建てられたとされる。金堂には廬舎那仏・薬師如来・千手観音像が安置されていたが、ひと際目を引くのは千手観音像ではないだろうか。多くの千手観音は本当に千本の手があるわけではないが、唐招提寺の千手観音像は、（現在は九五三本しかないが）当時、千本の腕があったとされている。非常に繊細な仏像で、その場を離れるのが惜しいくらいだった。

次は、今回の旅行のメインともいえる平城宮跡に向かった。遣唐使船、朱雀門、大極殿。どれも色鮮やかに復元され、当時の情景を伝えていた。また、平城京歴史館内で見ることが出来るシアターでは、大極殿が当時どのように使用されていたか等をスクリーンで見ることができ、大変勉

強になった。今回、平城宮跡を見学して、ここが当時の中心地で、文化・文学の発展があったところだと思うと、もはや言葉も出ないほどだった。また、ここでは平城遷都一三〇〇年祭の記念マスコット「せんとかん」や「まんとかん」といったキャラクターと思い思いに写真を撮ることもできた。

平城宮の広大さに疲労の色が見え始めたが、次は興福寺に向かった。興福寺といえ、最近東京で展示会が行われ大盛況をおさめた阿修羅像で有名だ。さっそく見学したが、「阿修羅」という名とは裏腹にその雰囲気はどちらかといえ、穏やかささえ感じさせた。眉根を寄せてはいるが、苛烈な感じはせず、何時間でも見ていられる不思議な仏像だった。

この日最後の見学は東大寺。なんと四〇分の弾丸見学だ。境内にはたくさんの鹿が煎餅をねだってくるが、それらを振り切り大仏殿へ直行した。ここでは盧舎那仏が安置されているが、珍しく写真撮影が可能であり、私も例にたがわずカメラに収めた。盧舎那仏の感想はただ一言「圧巻」それに尽きると思う。その大きさは見上げるほどで、宇宙の真理をすべての人に照らすという盧舎那仏にふさわしいものだった。

駐車場まで走ってもどり、この日の見学は終了した。夜

大極殿（平城宮跡）



にはホテルのレストランで懇親会が行われ、歩き疲れた体を休めた。また、前日の万葉百人一首大会の優勝チームに池田先生から「せんとかん」グッズが贈られるなど、最後の夜は楽しくふけていった。

### 三日目（九月一七日）

最終日。ホテルを後にし、まず初めに向かった先は恭仁京跡。

恭仁京は、七四〇年に聖武天皇によって遷都された都である。七四〇年からの数年間、聖武天皇は都を転々と移していた。結果この恭仁京は三年ほどしか使われず、都が難波に移ってからは山背国分寺に転用された。恭仁京は平城京に比べると小さな都であり、大極殿などは平城京で使用

されていたものをそのまま移築して使用していたそうで、現代に先駆けてなんともエコな都だったといえる。

今回はその恭仁京跡の一角である、国分寺の塔跡を訪れた。バスを降りて道なりに歩いていく。家が立ち並ぶ道を進みながらこんなところに跡地があるのか心配になってきたころ、小さな公園が見えてきた。周囲を山に囲まれ、ピクニックをしなくなるような素敵な風景が広がっていた。と同時に、公園ではゲートボールを楽しむお年寄りの姿が。ゲートボールを楽しむお年寄りたちの間を横切り国分寺の塔がたっていた跡にある碑文の前へ。

塔跡には、花崗岩でできた巨大な礎石が残っている。この岩の上には七重の塔がたっていたと考えられているのだが、今はその七重の塔の跡形はなく想像するのみ。こんな歴史的なものに囲まれて生活できることをとても羨ましく思うと同時に、生活の中に文化が息づいていることに驚かされた。

次に向かったのは宇治にある源氏物語ミュージアム。宇治は宇治茶とあるようにお茶と、『源氏物語』の最後の部分、宇治十帖の舞台として有名な場所である。

源氏物語ミュージアムはその名の通り『源氏物語』をテーマとしたミュージアムである。館内には、源氏物語の世界を模型や映像などで再現した空間が広がっている。平安

時代の文化などを知ることができる。目の前に広がるのは絵巻の世界。源氏物語をあまり知らないという初心者でもすんなり源氏物語の世界に入り込め、楽しく知ることができる。ミュージアム内の淡い色使いがとても美しく印象深かった。

源氏物語ミュージアムを出て、宇治散策を兼ねて次に向かった先は、宇治上神社と宇治神社。宇治神社には「宇治」の名前の由来地名起源説ともなった菟道稚郎子という神様の家があったとされているところである。一方、宇治上神社は我が国最古の神社建築として知られている。また、宇治十帖に出てくる八の宮の山荘のモデルとされる場所でもある。宇治上神社は世界遺産にも登録されている場所ではあるが、森をバックにたたずむ拝殿は左右に広く、落ち着いた雰囲気があり、まさに隠れた名所といった感じであった。

宇治川を渡り昼食をとる喜撰茶屋へと向かう。宇治川の流れは、思っていたよりも早く水量も豊富で、ごうごうと水の音が橋の下で響いていた。橋から川の流れをずっと覗き込んでみると吸い込まれそうな感覚になった。

腹ごしらえを終えて向かった先は平等院鳳凰堂。平等院の鳳凰堂といえば十円玉の裏に描かれていることでも有名である。鳳凰堂は中堂・左右の翼廊・尾廊からなっている。

左右の翼廊は左右対称に作られてあり、鳳凰堂という名の通り、鳳凰が翼を広げた姿だとされている。そのためか鳳凰堂のたたずまいは、優雅で美しく威厳があるように思えた。

また、鳳凰堂の目の前に広がる阿字池に映る逆さ鳳凰堂も美しく、極楽浄土をイメージして作られたというのも納得である。阿字池から鳳凰堂の中堂と向かい合うと、中堂の上のほうに小さい窓があいていてそこから阿弥陀如来坐像の顔を見ることができる。

宇治は当時の貴族たちの別荘地であり、平等院鳳凰堂も元は藤原道長の別荘であった。それを道長の息子の頼通が寺院に改めた。平等院は栄華を極めた藤原氏の華やかさを伝えてくれる場所であるように感じた。平等院鳳凰堂は国宝であり、世界文化遺産にも登録されている。

中堂へ入ると、中には国宝の阿弥陀如来坐像が安置されている。中堂内は狭く、一度に入れる人数が制限がされている。阿弥陀如来坐像を近くでまじまじと見ることができた。また、堂内の上の方の壁には雲中供養菩薩が安置されている。名前の通り雲に乗っている菩薩なのだが、いろいろな楽器を手に取り楽しそうにしている姿がかわいらしかった。その他堂内の扉には絵が描かれており、創建当時に掛かれたものらしく、ところどころ絵具が剥けてしまっ

てはいるもののうつすらと見ることができた。時代を経て色あせない思いがそこにはあるような気がした。文化財を伝えながら守っていくのは大変な努力が必要なのだと感じた。

鳳凰堂は、平成十九年の九月に平成の大修理を終えて美しくなったばかり。この堂内に安置されている阿弥陀如来坐像の白毫は、修理の際に木製のものから本物の水晶に変えられたそう。中堂から池に面した廊下に出て、阿弥陀如来坐像のほうを振り返ると白毫は太陽の光に照らされて銀色に輝いていてそれがなんとも印象的であった。

驚いたのは平等院の創建当時の姿だった。今でこそ素朴な色合いの作りのように思えるが、創建当時建てられた当時は色彩豊かな色美しい堂であった。さぞ、まばゆく極楽浄土の世界を再現していたのだと思うと感慨深いものがあった。また、平安文化を代表する貴族の生活の華やかさを垣間見ることができた。

鳳凰堂も、宝物類が保存展示されている鳳翔館もみることで、鳳翔館ではコンピュータグラフィックによる鳳凰堂内色彩復元などや堂内には安置されていなかった他の雲中供養菩薩二六体などを見ることができた。最後には、ミュージアムショップをしっかりとチェックしお土産を購入することもできた。

最後に訪れた場所は、醍醐寺。醍醐寺は京都の洛南に位置しており、五重塔は国宝に指定されている。醍醐寺は真言宗醍醐派の総本山で貞観十六年（八七四）に僧・聖宝が草庵を建てたのがはじまりである。また、豊臣秀吉が愛した寺としても知られている。

桜の名所としても名高い場所であるが、今回は残念ながら桜は見られなかった。しかし、青々とした木々の葉に癒された。

醍醐寺は境内がとてつもなく広く、時間の都合もありすべてを見て回ることはできなかったが、醍醐寺を代表する五重塔と三宝院を拝観した。五重塔は、九五一年に創建されたものであり、下から見上げると首が痛くなった。三宝院の庭園は美しく、池には鯉が泳いでいて、じつくりと建物の中を見て回ることもできた。各間に名前がついており、襖絵も残っていた。今度は是非桜の季節に来たいと思った。あつという間の三日間ではあったが、万葉の息吹を身をもって体感することができた三日間であった。

これを以て、三日間の万葉旅行の行程は滞りなく終了した。

古代史の舞台を前にして奈良時代の文化に触れ、肌で感じ、その息吹を実感することができた。とくに宮都の跡地

で感じた当時の歴史の背景、壮大な景色、この地で過ごしていた人々の暮らし、まるで自分が奈良時代にいるかのようにつながった。また、背景にある歴史を知ることさらに文学の知識を深めることができた。この万葉旅行において私達一人一人、さまざまなことを感じ、味わい、学びを得ることができたと確信している。

最後に、充実した行程で私たちを引率してくださった池田先生と植田先生、私たちをサポートしてくださった荒金さんに感謝したい。

（平成二十二年国文学科三年生 小坂紫沙綺

同 齋藤 綾香

同 佐々木美菜

同 森川和嘉菜

恭仁京にて



薬師寺にて



東大寺・南大門にて

